チクタクロックが殺しに来る

低学歴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
チクタクロックが殺しに来る

【Ｎコード】
Ｎ９９５４Ｚ

【作者名】
低学歴

【あらすじ】
［チクタクロック］ＶＳ［アクセルドーム］

ーーー僕はあの日、大好きな女の子を見殺しにしました。

彼女の噂を聞いたことがあるだろうか。
チクタクロックという、真っ赤な服の美少女の話だ。
主人公、拓哉はぼんやりと、幼なじみの噂話に付き合っていた。
しかし、彼がその話を耳にした途端、周囲の状況はめまぐるしく変

わっていく。
能力者、死神。
不可解な者たちの出現に伴い、彼はある日、過去のトラウマとの戦いを強いられることになる。

プロローグ・僕は許されざる罪人です

チクタク、チクタク。
古びた時計が時を刻む。昔っから変わらず、針は回る。
その時計を見ていると、隣に真っ赤な服の女の子が現れた。
彼女は言う。

「今は西暦何年だ？」

おかしなことを聞くもんだ。
今は、西暦２０××年だ。

「そうか。ありがとう」

途端に、彼女はその場から消えた。
幻のようだった。いや、幻だったのかもしれない。
そこには彼女がいた痕跡はなく、緩やかに時を刻む時計の音だけが聞こえるだけ。
彼女は、チクタクと時を刻む時計であり、その時計は秒を進めるだけで針の音が地を揺らす。
そう、彼女が、チクタクロック。

……。

この東出高校には、とある噂話がある。
それは、謎の美少女が突然現れるらしい、といういわゆる怪談の類なのか判別しにくい物だ。

なんでも、その美少女は自分のことをチクタクロックと名乗っているとか。
服装もこの学校の制服ではなく、体中を覆う真っ赤なマントに、真っ赤なテンガロンハットをかぶっていて、魔法使いにも見えるらしい。

「でね、チクタクロックは」

喜々として話す彼女、峰倉花（みねくらはな）は、僕の幼なじみだ。
今日は久しぶりに二人の時間が空いたということで、近くのジャンクフードの店で談笑している。
そろそろ、一方的に語られるのもツラくなってきて、次は僕から話を切り出した。

「結局、それは七不思議みたいな物なのかい？」
「……なんか違うのよね、他の七不思議なんかとは。別次元、っていうのかしら」
「別次元？」
「うん。チクタクロックは、世界からはみ出した杭を叩くのが仕事らしいの」
「それを、チクタクロックが言ってた？」
「知らないわよ。ただの噂なんだから」

一応彼女とは同じ高校なのだが、チクタクロックなんていうのは初めて聞いた。
そもそも、僕は人と話すことを疎（うと）む性格だから仕方ないのだが。
世界からはみ出した杭。出来過ぎた天才か、それとも世界侵略なんか考える独裁者か。
どちらにしても、あまり僕とは関係はなさそうだ。
面白そうにしていない僕の顔を見て、峰倉は頬を膨らませた。

「やっぱり、拓哉に話すんじゃなかった」
「おいおい、聞かせといてそりゃないだろう」
「聞かせてあげたんですぅ。全然周りのこと知らない拓哉のことだから、知ったら良いリアクションしてくれると思ったんだけどなぁ」
「何年も一緒にいたら、僕がそういう質(たち)じゃないことは分かるだろう」
「あー、無駄な時間使ったぁ」

そう言って、峰倉はカップに刺さったストローに口をつけ、窓の外を見ながら飲み始めた。
一度怒ると、もう話を聞いてくれないのは昔から変わらない。
仕方なく、僕は持っていたハンバーガーにかぶりつく。

「あー!!」

突然の大声に、僕は飲み込もうとしていたハンバーガーを喉に詰まらせた。

「ゲホッ、ゲホッ」

咳こみながら、ハンバーガーを流しこむために手元のジュースを一気に飲み干す。
ようやく楽になってきた頃、一言文句を付けようと顔を上げると、峰倉は窓の外を見つめたまま固まっていた。
だけどすぐに彼女は体を震わせ、爛々と輝かせた瞳でこちらを見た。

「ねえ、修くんよ、修くん!」

僕と窓を交互に見て、峰倉はキャーキャー騒いでいる。
仕方なく窓の外に目を向ける。

「あー、修……ね」

そこには、たくさんの女の子に囲まれる顔立ちの良い好青年が立っていた。手足はがっちりとしているのに、顔は小さくて整っている。体育会系の体つきにホストみたいな顔のくせに違和感はなく、むしろプラスに働いているくらいだ。
顔面にびっちりと貼り付けられた、アイドルがファンへ送る愛想笑いみたいな笑顔をする修を見て、僕は顔をしかめた。
なぜかは知らないが、あの笑顔が妙に気に入らない。
あれは何か隠しているようで、内に秘めた物を出さないように踏ん張っている笑みだ。

「拓哉、妬いてんの？」

峰倉が言った。

「なにが？」
「修くんを、まるで目の仇みたいに睨んでるから」

言われて気づく。
僕の眉間にはシワが寄り、口はへの字に曲がっていた。客観的に見れば、修に嫉妬しているようにしか見えない。
すぐさま無表情に戻して、首を傾げてみせる。

「そうかな？」
「そうよ。拓哉は、顔がそこそこ良いんだから彼女ぐらいいそうだけどなぁ」

「じゃあ峰倉がなってみるかい？」
「あー、止めて。友達のままの方が気楽よ。恋愛感情も無いし」
峰倉は腕を振って否定した。
片眉を下げて、困った顔をしてみせる。
僕も、彼女に恋愛感情は無い。家族のようであって、それ以上の気持ちになったことはなかった。
高校に上がってからも、それは変わらない。
周りからは付き合ってるんじゃないかと囃されるが、それにも当たり障りのない返事をしていた。
彼女なんていらない。僕には、女の子との関係なんか、必要ない。
あの日を繰り返すだけだ。

「ちょっと、修くんを追いかけてみようよ」
「お、おいおい。恥ずかしいからやめてくれよ」
「ちょっとだけよ、ねえ？　いいでしょ」
峰倉が僕の腕を掴んで懇願してくるが、
「悪いけど、一人で行ってくれ。僕は追っかけになるほど暇じゃないんだ」
と言い、腕をはじいた。
素っ気なくされた峰倉は頬をまん丸に膨らませて、目を釣り上げる。
「なら、いいわよ！　あたしも、別にそこまで好きでもないし！」
声を荒げる峰倉に、僕は頬杖をついて言う。

「さっきまではしゃいでたのは、どこのどいつだよ……」

膨れっ面を呆れ顔で見つめながら、僕はため息を吐いた。

月曜日、朝のホームルームの終わりを告げるチャイムが鳴った。
クラスのみんなは、授業の準備もせずに友達と立ち歩いたり、話をしている。
教室の隅っこ、窓際の席にいる僕は、体育の授業で校庭に集まってくる上級生を、ぼおっと眺めていた。
遠くから見ると、あれってアリみたいだ。黒い粒がちょろちょろ動き、そのあとを追うように、他のアリがついて行く。
風がカーテンをなびかせた。
同時に、僕に声がかけられる。

「今日は、ずいぶんらしくないね」

声のする方を向くと、同級生の水無月琴葉（みなづきことは）だった。
この学校で、僕の数少ない友人の一人であり、性同一性障害者である。
彼は男だ。しかし、顔立ちから何まで女にしか見えない。声も中性的で、男だと教えられなければ、まず分からないだろう。

「昨日、何かあったの？」

男とはこれっぽっちも思えない、柔らかな音を喉から響かせる彼に、僕は首をどちらに振ろうか迷った。
修の、あの憎たらしい笑顔を見たからなのか、否か。
堂々巡りしている頭を振って、首を縦に落とす。

「なんでもないよ。気分が悪いだけ」
「そう？　私で良かったら、悩み事でもなんでも気軽に言ってね」
「ああ、ありがと」

肩まである髪を翻して、琴葉は去っていった。
そういえば、彼にはまだ教えてもらっていないことがあった。
彼は、生まれつきの性同一性障害ではないらしい。
幼い時に、生涯のトラウマになるレベルの事件があった、ということだけを琴葉の母親から聞かされていた。
だから、変な子でも仲良くしてやってね、だと。
僕は、アイツがそういう人間だとしても、嫌いにはならない。たかが性別を間違えてしまっただけに過ぎないからだ。
僕だって、女の子に産まれてさえいれば、あんな思いもしなくて済んだのに。

……。

彼女は、僕を好きだと言ってくれた。
その言葉に、僕も、と返した。
いつまでも続くはずだったんだ。ずっと、笑いあえる日々を送るはずだったんだ。
あの日、彼女が死んでしまい、そこにいた僕は、死にゆく彼女を黙って見ていた。
助けようともせず、誰かを呼ぼうともせず、声をかけることもせず。
彼女から溢れる出るおびただしい量の血に、僕はこの上ない恐怖を感じてしまっていたんだ。
息絶える寸前、彼女は僕の方へ、苦痛に歪んだ顔を向けた。

僕は醜くなった彼女の姿に、ビクンと体を強ばらせた。
その時の彼女の顔が忘れられない。
哀れむような、蔑むような、恨んでいるような。
その全てが僕に向けられたことが怖くて、悲しくて、そこから逃げ出してしまった。

僕は卑怯者だ。
彼女のお葬式では涙一滴すら流れなかった。まだ、彼女のことが怖くてたまらなかったんだと思う。
流れろよ、流れてくれよ。
必死に目に力を入れるが、出てくれない。
遺族の人たちは、泣かないのは死を受け入れてないからだと言う。
違うんだ。死を受け入れてしまったから泣けないんだ。怖いんだ。
恨めしそうな顔をした彼女が、僕を呪いそうで。
僕は罪人だ。許されない罪人なんだ。
唯一僕を許せる彼女は、もう僕の前にはいない。

昔の思い出にふけっていると、一時限目の授業が終わった。
起立、という言葉で立ち上がり、礼、という言葉で席に座る。
首もとに汗が溢れていて、それを手で拭った。手を確認すると、玉になるほどの汗がべっとりと付いていた。
ハンカチで首を満遍なく拭いて、また窓の外を覗く。
青空のキャンパスに、白い雲が悠々と流れていく様は、つらい気持ちを忘れさせてくれた。
チクタク、チクタク。
ふと、彼女がよく口ずさんでいた歌が聞こえた気がした。

第一話・思考と束縛

僕と彼女の関係は、僕と彼女と、その親しか知らない。もちろん、幼なじみの花も知らないはずだ。

別に知られても良かったのだが、秘密という心くすぐられる響きに、僕と彼女は魅了されていた。

週に一回、彼女の家で遊ぶ。

おままごとや、テレビゲームや、トランプや。

彼女とは、色んな遊びをやり尽くした。

将来は結婚しようね、とか言い合ったりして、好きな気持ちをいつでも、どんな時でも表していた。

絵で、彼女との新婚生活を描いたり、老後を思い浮かべてみたり。

ああ、なんて素晴らしい未来予想図。

僕に彼女が微笑んでくれる。

それだけで、僕は毎日が幸せでした。

……。

狭い空間の中、栗色の髪をした女の子が心ここにあらず、という顔で椅子に座っていた。

「世界からはみ出した杭……か」

女の子ーーー峰倉花は、いつもの彼女にしては珍しく、学校の図書館にいた。

考え事をするには、こういう静かな場所がうってつけらしいのだが、逆に静かすぎて、考えが四散しがちになってしまう。

「アイツが邪魔になるけど……」

頭で浮かべた言葉が口からボソボソと出てしまうのは、彼女の悪いクセだ。

「ようは……どうやって拓哉を誘き出すか……」

独り言を呟く峰倉は、明らかに不審者なのだが、図書館にいる誰もが彼女の奇行を気にしていない。

まず彼女のような人間も少なからず利用するため、ということが挙げられる。

もう一つ、図書館の隅っこの席にいるからだ。

そこは本棚が彼女の周りを囲っていて、あまりの狭さと閉塞感で息が詰まりそうになるはず。しかし彼女は、

「でも……口実が無いのよねえ」

どこを見ているかも分からない目をして、考え事を呟いているだけだった。

あまりに頭を使いすぎて、視界にまで意識が行っていないのだろう。

「しかし、もう時間はありません」

いきなり彼女の口から、はっきりとした声が発せられた。

つい出てしまった言葉ではない。むしろ、意識的に誰かに伝えるために発したようでもあった。

「分かっているとも」

彼女の背後に突然、細身の少女が現れた。
服装は、赤いマントに赤いテンガロンハットを着込んでいた。
峰倉の背後には、高々と伸びる本棚があり、その左右にも同じくらいの本棚が立っている。
つまり、背後へとまわるならば彼女の目の前を通らなければならない。
しかし少女はどこを通ったわけでもなく、シーンを丸々切り取ったみたいに現れたのだ。
少女は峰倉の肩に、赤い袖から少しだけ出した、服とは対照的に真っ白い手を置いて、耳元で囁く。
「俗物が思考しなくてよい。お前はお前の任務を遂行しろ」
峰倉は、ハッ、と意識を取り戻した。
慌てて辺りをキョロキョロと見回す。
「なにしてたのかしら……あたし」
すでに、あの少女は姿を消していた。
現れた時と同じ、突然に。
「まず……なんか考え事しようとして、図書館に来たのよねぇ……」
彼女は、まるで一連の会話を忘れてしまったように、顎に人差し指をあてて、思案顔をする。
それでも何も解決せずに、彼女は肩をすくめて、
「まっ、こういうこともあるわよね」

と言って席を立ち、図書館から出て行く。

真っ赤な服の少女が立っていた場所に髪の毛が一本、ひらりと舞い落ちた。

教室に戻ると、クラスの女子達が固まって話をしていた。

峰倉は「なになに？」と会話の輪に入る。

すると、その中の一人の女子が眉間にシワを寄せて振り向いた

「あ、花か～。あんた、前にチクタクロックの話してくれたじゃん？」

「うん」

確かに、峰倉は以前この女の子たちにもチクタクロックの話をしたことがある。

都市伝説の話題の時に、ポロッと口からついて出た程度なのだが、いつの間にか噂が肥大化してしまっていた。

やれ死神だとか。やれ魔法使いだとか。

もちろん、元々彼女が聞いた噂自体、デマなのかもしれないが。

「出たんだってさ、チクタクロック～」

「え！？」

これには、噂を流していた峰倉も驚いていた。

彼女自身、チクタクロックはただの噂話にしかすぎないと高をくくっていたからだ。

女の子は、少しだけ声のトーンを落として話す。

「二組の女子が見たんだってさ。赤いマントに赤いテンガロンハッ

トの少女が、人を殺しているのを」
「人を！？」
ちょっとばかし、噂と食い違っていた。
チクタクロックは世界からはみ出した杭を叩くのが仕事。なのにどうして、人を襲っているのか。
疑問に思ってはいるが、彼女はそれを言葉に出さないでいた。
「男の人をバラバラにしてたらしいよ？　首を鉈でぶった斬って、血がブシャーって！」
「や、やめてよ～！」
峰倉は自分の体を抱くように腕を伸ばし、女子を睨んだ。
彼女はアハハと、峰倉の怯える様子に対して、心底面白そうに笑う。
つられて峰倉も笑った。
「結局、チクタクロックってなんなのかなぁ？」
別の女子が言った。
最初こそ噂だけだったはずなのに、今ではチクタクロックと名乗る少女が殺人を犯している。
わざわざ考えるまでもなく、単純に、噂に触発された愉快犯だろう。
当然、良い気はしなかった。
つまりその事件は、峰倉が面白がって噂を話していたために起きたかもしれないからだ。
「チクタクロックの真っ赤な服って、全部血なんじゃない？」
「ちょっと……鳥肌立ったぁ」

「でも、血って渇いたら茶色くなるんだよね？」
「アハハ、リアルぅ～」
クラスメートがふざけて笑いあっていても、峰倉は笑ってはいなかった。
俯いて、目を閉じて、いろいろ考えを巡らせていたのだ。
「……その手もあったか」
「ん？　花、なんか言った？」
女子が話しかけてきて、峰倉はやっと顔を上げた。
「な、なんでもないよ！」
と言って、胸の前で両手を振った。
怪訝そうに見つめてくる女子達に、峰倉はなんだか居心地が悪くなり、
「じ、じゃあさ、真相を確かめに行かない！？」
思いつきで切り出した。
その言葉に、皆が笑顔になって頷きあう。
「いいね、行こうよ！」
「探偵みたい～」
「犯人見つけちゃったりして」
ハシャぐ彼女たちを見ながら、峰倉は全身に汗をかいていた。
背中から首筋まで。ベッタリとシャツが肌に付着してきて、気持ちが悪い。

心臓もバクバクと鳴っていて、もしあのまま彼女たちに怪訝な顔で見られていたら、心臓発作でも起きそうなほど脈打っている。
なにかの拒絶反応のようだった。いや、体を通じての警告か。
ーーーこれ以上、誰にも疑われるな。
峰倉の頭の中で、その言葉が何度も何度も忠告してくる。

（分かってる、分かってる……！）

制服の、胸の布をくしゃりと握り潰し、必死に冷静を保つ。

「じ、時間も無いし、次の休み時間に行こうよ」
「そうだね」

女子たちは、気分よく峰倉の意見に賛同してくれた。
心臓も、だんだんおさまってきた。
しかし、冷や汗は未だに流れ続けていて、背筋に悪寒は走るし、喉は痛くなるほど乾いている。
この異常な症状に、峰倉は疑問を抱かない。

（罰、罰、罰）

頭の中に流れた忠告のように、ひたすら“罰”と繰り返していたからだ。
彼女の思考は、また別のことに働いていた。

授業中、後ろの席から折り畳まれた小さな紙切れが渡された。
パラッと開けてみると、文字が書かれている。

今日、午後七時に人を殺す。

明日、また噂を流す者が現れる。
その補助をしろ。

峰倉はそれを読み終えると、表情というものの一切を失った。
焦点の合わない目を泳がせ、紙切れを自分のカバンに強引に突っ込む。
誰も……彼女の行動に気づいていない。
いや、気づかされない。
まるで、クラスの全員が操られているかのように、一人として彼女を見ず、ノートやルーズリーフに目を落とし、黒板に書かれたことを板書していた。
彼女は、その全員が一斉に目を逸らす隙を知っていた。

「……了解」

峰倉が呟くと、周りからポツポツと話し声がし始めた。
解凍され、息を吹き返したみたいに峰倉は慌てて板書する。

（なにボーっとしてたのかしら）

峰倉は紙の内容も、どこへしまったかも覚えてはいなかった。
何の事はなく授業は進み、二時限目の終わりを告げるチャイムが鳴った。
いつもの挨拶をして席に座る。
ノートを机の中に押し込んでいると、チクタクロックについて話していた女子たちが峰倉に近寄ってきた。

「花、さっそくチクタクロックについて聞きに行こっか」
「う、うん」

峰倉は言い出した手前、断るわけにはいかない。
彼女は席を立って、女子たちと一緒に教室を出た。
後ろの席、つまり峰倉に紙切れを渡した男子ーーー浅間京(あさまきょう)は、教室から出て行く彼女たちの後姿を見て、ニヤリと微笑んだ。

第二話・聴取と疑念

彼の愛していた女の子が死にました。
突然の出来事でした。彼女は真っ赤な液体を、水風船が割れたように流し、赤い水溜まりを作っていきます。
誰かの悲鳴。駆ける足音。
それは、彼でした。
目に涙を浮かべ、まるで鬼か悪魔に追いかけられている苦渋の表情であたしの存在に気づかず横を駆け抜け、消えていきました。
その時のあたしは、一度しかめた顔を、すぐに笑顔へと変えたと思います。それはそれは、とてつもなく邪悪な笑顔を。
……やっと、邪魔な女が死んでくれた。
死者を冒涜し、彼の気持ちを踏みにじり、人間においてあるまじき考えを持ってしまいました。
いつからでしょう。彼のことが頭から離れなくなったのは。寝ても覚めても、彼の笑顔が見たくなっていました。
学校で、道端で、家で。彼の笑顔は、あたしのこの渇いた胸に染み渡り、ナイフを突き刺します。
なぜなら、彼が向けた笑顔のそのほとんどは、彼が心から愛しいと思っている彼女に送ったものなのです。
憎い。憎い。ああ、なんと憎い。
彼に微笑むな。彼に触れるな。彼に話しかけるな。彼に近づくな。お願いですから、あたしにも彼の笑顔を独占させてください。一カ月、いや一日で良いのです。
しかし、現実は非情でした。
彼女が死んだその日から、彼から一切の笑顔が消えました。
彼女に向けていた笑顔だけではありません。彼が友人と話している時の笑顔も、失敗した時に見せる作り笑いすらも、あたしへのほんのちょっとの笑顔さえも。

一日中見ていても飽きないほど、狂うほど愛おしい笑顔は、泡のようにはじけてしまいました。
あたしは、頑張りました。何年も、何年も、幾年月も。
しかし、彼に笑顔は戻りません。
あたしでは、彼を笑わせられません。
一流の道化師。一流の漫才師。コメディ、感動。なんでもいいのです。
彼に笑顔を、取り戻してください。
それだけが、あたしの望みです。
あの頃に戻れるならば、あたしは憎き彼女を救うでしょう。

……。

リーダーの女子が二組の扉を開けて、ずかずかと中に入り込んでいく。
峰倉と他の女子たちも、彼女の思い切りの良さにつられ、おずおずと足を踏み入れた。
女子が、一人の大人しそうな女の子へと駆け寄って行った。
「あなたが、立花月子さん？」
「……そうですけど」
複数人の女子に囲まれた立花は、少しばかし驚いている様子だった。
鼻からずれたメガネを戻しつつ、彼女は首を傾げる。
「こんな大人数で……、チクタクロックのことですか？」

予想はついていたらしく、顔からすぐに驚きを無くし、ニコニコと笑顔を作っている。
二組の、他のクラスメートも予想通りという風で、峰倉たちに奇異の視線は向けていなかった。
先ほど立花に話しかけた女子が、彼女の両手をがっしりと掴んだ。
「そうなの！　私たち、探偵になりたいのよ！」
突拍子もない発言に、また立花は驚き、体が揺らいだ。
峰倉もため息をつき、掴んだ手をソッと離す。
「ごめんなさいね。こういうヤツだから。悪気はないのよ？」
「えっ、悪気しかなかったけど？」
峰倉が彼女の耳をひねりあげる。
「うん、話がややこしくなるだけだからねー」
「ご、ごごごめんごめん！」
女子は、やっと峰倉に開放してもらった耳を、半泣きになりながらすりすりと撫でていた。
峰倉は彼女の代わりに代弁するべく、一歩前に出た。
「あたし達、あなたが見たチクタクロックについて、詳しく訊きにきたの」
「いいですよ。……あんまり面白い話でもないですけど」
「覚悟はしてきてるわ。たとえ五体がバラバラになる話でも、四肢が千切れる話でも、五臓六腑が飛び出す話でも大丈夫だから！」
「そ、そこまで過激じゃないですよ？」

いつになく熱弁した峰倉に、付き添いの女子たちも引いていた。
普段、彼女はクールであるから、こういう熱い面はほとんど表に出さないのだ。
立花は机の上にメガネを置いて、目を瞑り「ウ〜ン」とうなり始めた。

「たしか、昨日の午後七時頃だったと思います」

一瞬だが、峰倉の胸に針のような物が刺さる痛みが走る。
ただ、あまりにも瞬間的すぎたため、今の彼女の記憶から『痛み』がすっぽりと抜け落ちていた。

「コンビニで、美味しくて安いケーキを買った帰り道です。結構背の高い人の背中が」
「美味しくて安いケーキ！？」

後ろから、峰倉に耳をひねりあげられていた女子が顔を出した。
瞳を輝かせて、興味津々に立花を見つめている。
その顔に向かって峰倉がひじうちを撃ち込み、話を続けさせる。

「えっと……。それは男の人……多分、二十歳くらいかな？　それぐらいの人が、噂通りの赤い服の女の子に、何かいろいろ言われてました。なに言ってたかは、風が強くて聞こえなかったんです。
で、突然女の子が走り出して、男の人の胸を刺しました。心臓を一刺しだったと思います。
男の人がぐらりと揺れて、そのまま地面に横たわりました。血が流れてたんですけど、凶器の刃物は胸に刺さってなかったですね。
そして、女の子は走り去っていきました。その後すぐにワタシは救急車を呼びました。すでに死亡していたらしく、救急隊の方は顔

をしかめていました。これがワタシの見た全てです」

立花の話が終わると、峰倉たちはホラー映画を鑑賞し終わった客のように、心臓を強く打ち鳴らしていた。

彼女の話し方がとても独特で、ありきたりな言葉でも、その場面を連想させるに足りる演技力だったからだ。

思わず峰倉は拍手していた。

「なるほどねえ。つまり、チクタクロックは通り魔なのかな？」

「そうみたいですね。もしかしたら、色恋沙汰なのかもしれませんが」

「いいわね、色恋沙汰」

ぬっと、峰倉にひじうちされた女子が、赤くなった顔を人混みから出した。

「愛の末の、儚くも夢ある終わり方ね。『あなたが愛してくれないなら、あなたを殺して私も死ぬわ！』みたいな。

きっと、二人の間には高い壁があったんでしょうねぇ。かなわぬ恋、ならば死んでかなえてみせよう、とかなんとか、イタッ！」

ペラペラと饒舌に語り出した彼女の頭に峰倉はゲンコツを入れた。

その時に舌を噛んだらしく、口をおさえて転げ、もがいていた。

「あ、ありがとうね、立花さん。いろいろ、ごめんなさい」

峰倉が頭を下げると立花も、

「いえ、久しぶりに楽しかったです。こちらこそありがとうございます」

と頭を下げた。
付き添いの女子たちも、立花に礼をした。
「ほら、立ちなさいよ」
舌を噛んでしまい苦しんでいる女子に、峰倉は手を差し伸べた。
素直に女子は峰倉の手を掴み、立ち上がる。
「悪のりしていい時と、悪い時があるでしょ」
「はぁい、ごめんなさい……」
そして、峰倉たちは二組をあとにした。

……。

放課後になった。
部活をしていない峰倉は、人の少ないげた箱で、上履きから外靴に履き替える。
「……チクタクロックって、ただの通り魔なのかな」
独り言は、彼女が思考モードに切り替わった合図である。
顎に人差し指をあてて、俯きながら歩く。
「……変な格好をして、人を殺して。噂と食い違ってるし」
ふと、思いついたように峰倉は顔を上げた。

「あれ、誰から噂を聞いたんだっけ？」
などと根本的な疑問に思い当たっていた。
しばらく記憶をたどっていたが、全く思い出せない。
「元々、誰が噂してたんだっけ……」
底なしの沼に浸かってしまったようで、峰倉はヒドく気分が悪かった。
無い物の記憶を掘り出そうとしているというのは、開かないプルタブに必死に指を食い込ませる痛さと苛立ちに似た感じを覚えさせる。
「……あー、思い出せない～。くぅぅぅ、うぅ……」
頭を抱えて捻りだそうとするが、全く、これっぽっちも浮かび上がってはこなかった。
「もしかして、あたしが無意識に作った嘘なんじゃ……」
と、かなりくだらない結論に至ると、峰倉の肩がビクッと跳ねた。
「あ……あ……！」
（息が……できない！？）
突如として、喉に何か特大の食べ物を詰まらさせたような痛みが走り、息が肺まで通らなくなった。
峰倉は喉を掴み、膝をつく。

苦しむ彼女の目の前に、一人の少女が現れた。

「オマエ、どうして思考する？」

（なにを……言ってるの、この子……、……！？）

峰倉は、その姿に見覚え、いや聞き覚えがあった。

そう。彼女が学校中に広めてしまうほどに噂していた、赤い服の少女。

（チクタク……ロック！？）

その存在に気づいた峰倉は、体中の毛が逆立っていた。

生存本能が、“逃げろ”と警告する。

だが、もう動くことすら出来ない彼女には、逃げることなど出来はしなかった。

コンクリートの地面に顔をつけて、必死に息を吸い込もうと喉に力を入れている。

ひざまずいた彼女に、チクタクロックは言う。

「無駄だ。喉を食道への一本道で固定した。今のオマエに入る息は、ミリ単位ですら表せないほどに少ない」

見下す視線を全身に感じながら、峰倉は声を絞り出そうとする。

「か……はっ……」

（助けて……助けて、拓哉！！）

涙をボロボロと流しながら、ひたすらに心の中で叫ぶ。

すると、

「何をしているんだ！！」
（拓哉！？）

一人の男子生徒が、峰倉たちの元へ駆け寄ってくる。
そして、彼女と少女の間に割り込んだ。
その男子生徒はスラリとして、全体的に細い印象をうける。浅間京だった。
彼は少女を、キッ、と睨みつける。

「峰倉を開放しろ！」
「ソイツは、作戦に害をなす存在だ」

浅間の叫びに、少女は冷たく言い放った。
それでも彼は、更に強く少女を睨む。

「お前……。俺が作戦を手伝えば、彼女と恋人同士になっている歴史に書き換えてくれるんだろう！？」
「……そうだが」
「なら、早く彼女を開放するんだ！」

（なんの話をしているの？　恋人同士？　歴史を書き換える？）

「確かに言った。だが、この歴史の峰倉花を殺しても、書き換わった世界にも峰倉花は生存している」
「たとえそうだとしても、俺はこの歴史の彼女が死ぬのだけは断固、反対する！！」
「反対とは？」
「……お前の作戦から、抜ける」

浅間が、小さく、しかし強い意志のある宣言をすると、今まで峰

倉を苦しめていた喉の詰まりはスッと消えた。
何度も咳き込み、荒い息を吐く。

「峰倉、無事か！？」

先ほど少女と対峙していた態度も失せて、浅間をびっしょりと額に汗をかきながら、峰倉を抱き起こす。
赤い服の少女は霧のように消えた。そこに、髪の毛がひらりと舞い落ちる。
抱きかかえられた峰倉は、浅間を見つめる。

「はぁ……はぁ……浅間……くん？」
「そうだ、浅間京だ！　もう大丈夫だから、大丈夫だから」

その心配そうに峰倉を見つめる浅間は、彼女が今まで見たことのない顔だった。
峰倉はまだ息は荒くて、落ち着かせるために深呼吸を繰り返す。

「どうして、浅間くんが……」
「……すまない、峰倉」

峰倉が何か言いかける前に、浅間は彼女を自分の胸にうずめさせた。
耳を伝う彼の心臓音は、かなり早く脈打っていた。
峰倉が抱かれたまま、されるがままになっていると、浅間が慌てて体から引き離した。

「ご、ごめん峰倉。つい……」
「ううん、ありがと」

恥ずかしげに後頭部を掻く浅間に、峰倉は微笑みかけた。それを見て浅間も笑う。
心なしか、抱かれたことで彼女もドキドキしていた。

「今日は、俺が家まで送るから」
「えっ、いいよ！　別にそこまで」
「いや、いつ誰に襲われるか分からないから。峰倉は……その……可愛いから、さ」

最後に浅間が、そっぽを向いて、耳まで赤くしながら言った。
らしくない彼の姿に、峰倉は吹き出す。

「うん、じゃあよろしくね」
「お、おう！」

どこか空ぶっている浅間に、峰倉はまた吹き出した。

帰り道。
峰倉が浅間の手を引っ張る。
その間、浅間は終始無言だった。

「ねぇ」

じめじめとした暗い細道に入ると、急に峰倉が浅間へと振り返った。
彼女の何気ない行動に、彼は緊張し、背筋を伸ばす。

「チクタクロックと、何か話してたでしょ？」

「え、うん……聞いてたのか？」
「当たり前じゃない。あんなに近くにいたんだから」
「そう……か」
浅間は、心底言いづらそうに視線を逸らす。
「作戦ってなに？　歴史を書き換えるって？」
故意に峰倉は『恋人同士』というワードは外していた。
その方が、浅間も話しやすいだろう、という彼女なりの配慮だった。
浅間は何度も後頭部を掻き、口をもごもごと動かす。
「笑わないか？」
「笑わない」
「馬鹿には？」
「しないよ」
峰倉の視線は、真っ直ぐに浅間の目へと注がれている。
ついに追い詰められ、浅間は顔を上げた。
「じ、じゃあ言うぞ」
ゴクリ、と二人の固唾を飲む音が重なった。
「俺は、能力者なんだ」

第三話・嫌悪と過去

今、峰倉は口をあんぐりと開けたまま固まっていた。
その状況に耐えられずか、浅間はつぐんだ口を動かす。

「ほら、やっぱり信じられないみたいな顔するだろ」
「でも……でも、能力者って？」
「そのままの意味だよ」

視線を峰倉から逸らしつつ、浅間は話す。

「俺は、記憶を操作する能力なんだ」
「……？」

意味が分からず、峰倉は首を傾げる。
浅間は俯いて、ポリポリと頭を掻いた。

「つまり、その能力をチクタクロックに買われて、アイツのわけの分からん作戦に参加しているんだよ」
「はぁ……」

彼女の気の抜けた返事に、浅間は乱暴に頭をクシャクシャとかきむしった。

「ああ、もういい！　とにかく、さっさと帰ろう！」
「え、ちょっと！」

浅間は峰倉の細い腕を掴んで、引っ張る。
彼女は慌てて隣に駆け寄り、眉をひそめている彼に言う。

「こっちじゃないよ？」
「うぇっ！？」

一言注意すると、浅間は変な声をあげてのけぞった。
恥ずかしそうに視線を逸らして、元の道まで小走りで戻る。
彼の首から耳まで真っ赤になってしまっている。

「あ、案内してくれ……」
「……うん」

歩いている少しの間、沈黙が訪れた。
浅間は先ほどの失敗のせいで俯いてしまい、そんな浅間を気遣ってか、峰倉は声をかけないようにしている。
最初に沈黙を破ったのは、浅間だった。

「……変なヤツだと、思わなかったか？」
「え？」

呟いた彼に、峰倉は驚いて振り向く。

「能力者だとか、作戦だとか、さ」
「うーん」

すがる目で見つめている浅間に、峰倉はしばし考えていた。
だが、出たのは、

「信じられないっていうのが、大きいかな」
「やっぱりか……」

はっきりとした発言に、浅間は肩を落とす。
どんよりと暗い表情になって、深いため息を何回も吐いた。
気まずい沈黙が、また訪れた。
二人の足音は一向に重ならない。

「あたしの家、ここだから」

峰倉が三階建ての家の前で立ち止まった。
小さな門を開けて、家の中へと進んでいく彼女を、浅間はぼんやりと眺めていた。
他に誰もいない道の真ん中、彼はさんざん迷っていたが、決心する。

「峰倉、また明日」

別れの挨拶を言い、手を振ったのだ。
黙っていた時間、彼はずっと考えていた。
手を振ろうか、振るまいか。

「うん、また明日ね！」

彼の不安や嫌な予想を裏切り、峰倉は手を振り返した。
彼女が扉の奥に消えていくまで、浅間はひたすらに手を振り続けた。
嬉しくて、嬉しくて。
扉が閉まりきって、浅間は手を止めると、どっと疲れが押し寄せた。
肩を揺らすほどの疲労を感じていながらも、彼は笑っていた。
（やっと、峰倉は俺に微笑んでくれた。拓哉なんかじゃなくて、俺

に！）

それだけがただただ浅間にとって嬉しい事で、彼は自宅に帰ったあとも、口の端を釣り上げてニコニコしていた。

……。

「うっ……うぁ……」

扉を閉めた峰倉は、猛烈な吐き気に襲われていた。

胃液が喉を焦がし、痛みを発する。　からいような、酸っぱいような味が口いっぱいに広がっている。

（浅間くんが……あの女の子の仲間……？　じゃあ、学校にいたらいつ殺されるか……！

でも、チクタクロックが殺しに来た時は助けてくれた……。でも、あれだって芝居かも……。

し、信じられるわけないじゃない！　自分を殺そうとしたヤツの仲間なんて言われて！

怖いよ……助けてよ、拓哉……！）

靴を脱ぎ捨て、玄関に足をかけた。

彼女は今、疑心暗鬼に陥っている。

浅間がチクタクロックの仲間だと言った時、自分を殺そうとしたチクタクロックがフラッシュバックして、一刻も早く離れたかったのだ。

いつ浅間が自分を殺しにかかるか分からない。

帰路につく最中、全く足音が重ならなかったのは、峰倉が逃げた

い一心で歩を早めていただけだった。
本当の彼女は、浅間に笑顔を向けることさえ怖い。
階段を上がりながらも、思考は定まらず、ひたすらにグルグルと回転していく。

（また明日って、なに？　秘密を知ったからには逃げるなってこと？　目に見える場所にいろってことなの？
学校に来なかったら殺されるの？　あたし、死んじゃうの？
それとも記憶を操作して、あたしを……あたしを……！）

口から垂れる涎にも気づかず、ベッドへと倒れ込んだ。
息を荒くして、虚ろな目で勉強机に乗っている盾に張られた写真を見る。

「拓哉……助けてよ……」

呟いた言葉は、浅間への気持ちなどこれっぽっちも入ってはいなかった。
植え付けられた恐怖心は、いつでも壊れかかっていた彼女の精神をいとも容易く破壊してしまった。

「次は……あたしが殺されるのかなぁ……」

晩になるまでの約四時間、峰倉は無意識で独り言をぼそぼそと口走るだけの人形になっていた。

ふと、母親の声がして、やっと気がつく。

「あれ、あたしどうしちゃったのかしら」

瞳に光が差し、峰倉は普段通りの彼女に戻っていた。
時計を確認し、急いで階段を駆け下りていく。

「お母さん！」
「あら花ちゃん、慌ててどうしたの？」

一階には、切羽詰まった表情の峰倉を見て驚いている母親の姿があった。

「な、なんでもないんだけど……」

ここまで走っておいて、今更、なぜこんなに焦っていたのか見当がつかなくなっている。

「そう？　ほら、もうご飯が出来たから食べちゃいなさい」

テーブルには、ぐつぐつと煮えたぎった大きな鍋。その周りにはお茶碗一杯の真っ白な米と、すでに溶いてある卵があった。

「今日はすき焼きよ。お父さん、もう少ししたら帰ってくるから、花ちゃんから先に取っていいわよ？」
「あ、うん」

峰倉は椅子を引いて、座った。
好物であるすき焼きを目にして、嬉しそうに笑うが、

「花ちゃん、どうしたの？」

母親が峰倉の顔を覗き込んだ。

「なんでもないよ、うん」
そう言いながらも、上手く笑えない。顔が引きつっている。
箸を持つ手が震えた。
「いた、いただきます」
奥歯を力の限りに噛んで、平静を保つ。
あの無意識は、彼女のつらい記憶を消すための時間だった。
だが、今までのように根本からは除けず、こうやって表に影響を及ぼし始めている。
徐々に、彼女は壊れていっているのだ。

……。

彼女は彼と付き合っています。
多分、彼らは隠しているつもりなのでしょう。
学校では、普段通りに会話していて、誰も二人の変化に気づきません。
でも、あたしには分かりました。
彼女に向ける彼の笑顔が、あたしに向けてくれる笑顔とはまるで違うのですから。
そのことに気づき、知った時のあたしは、奈落に突き落とされた愚者のようでした。
体の代わりに心が痛いんです。
骨折して、骨が肉を突き破った痛み。
高温の熱湯の海に落とされ、全身がただれて真っ赤になってしま

った痛み。
例えきれない激痛で、あたしは何度も嘔吐しました。
なんであたしじゃないの。いつも彼の隣にいたのはあたしなのに。
いくら現実を呪ったって、彼と彼女は仲が良いままです。
呪って、呪って、呪って。呪いまくって。
そしたら、思いが通じたのでしょうか。
彼を奪った憎い彼女は死にました。
きっと、神様があたしを選んでくれたんだ！　その時は無邪気に喜んでいました。
しかし逆でした。神様はあたしに罰を与えたのです。
罪もない彼女を妬んで呪ったあたしに、一生という長い間、大好きな彼の笑顔を見られないという罰を。
あたしは彼を独占できます。けれど、本当に欲しかった物はかえって来ません。
強くなくちゃいけない。
彼の折れてしまった心を支えるために、あたしの心は強くなくちゃいけないんだ。
嫌な記憶は消して、敵を作らないで、そのくせ人にはすり寄っていく。

あたしは罪人です。許されざる罪人です。
きっと神様は、こんなあたしを見てあざ笑っているでしょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9954z/

チクタクロックが殺しに来る

2012年1月5日22時46分発行